



唯一残った炭焼農家



今西勝さん(77歳)

煙と煤の臭いが立ち込める炭窯。空が白み出した頃、今西家の「窯出し」が始まります。「お前、まだ火あるかもしれないぞ。気い付けろ」声を荒げるのは、炭を焼き続けて60年以上になる今西勝さん。長男の学さんを見守ります。100度以上の高温になる炭窯に入っては炭を人力で取り出す作業。汗と煤をまといながらも、半日ほどかけて、1トンの「菊炭」を窯から出し終えます。

親父も僕もここが好きなんよ 当たり前前を誰かが守らなアカン

年明けから初夏にかけて、数十回に渡り繰り返される炭焼き。日本一の里山、黒川の所以はここにあります。

かつて炭窯は黒川の集落至るところにありました。ピーク時には約30軒が炭焼きを産業としていたといいます。しかし今、残すは今西家のみ。

長男の学さんは物心付く頃から炭焼きを手伝ってきました。現在、後継ぎとして両親と妻、子ども2人を支えています。

「日本一」と言われるのはうれしいよ。ただ、僕は昔からやっていることを続けているだけ」高校卒業後、農業大学に進学した学さん。父親の勝さんは、将来の仕事について、何も口出しすることはなかったそうです。

「違う仕事を考えた時期もあった。なんせこんな仕事やから。どこかに出掛けることもでけへんし、休みもない。それに、窯の中であれだけ煙を吸っていて体に良いわけがない。ただ、結局よそで働こうとは思わなかったな」学さんが炭焼きを始めてからも

黒川の人口は随分減りました。かつて、炭焼きが盛んだった頃の姿とは全く違うものになっているのです。それでもなお、学さんは「本当のところ、息子にも炭焼きを継いでほしい」と話します。「今後この村がどうなるかは分からへん。だから、親として考えるところもある。きつい仕事なんは、手伝っている息子もよう知っているはずやし。でもね、親父も僕もここが好きなんよ。山に入って木を切り育てる、炭を焼いてまた山に入る。それは僕らが知っている黒川の当たり前前姿。本音を言うと、大事ななは、日本一やない。里山は人が手を入れないと死んでしまう。守るためには誰かがやらなアカン。息子もそう思ってくれるなら続けてほしい」

なぜ黒川が日本一なのか

黒川で古くから続く茶席の高級炭「菊炭」の生産。

その原材料はクヌギで、地区周辺では、約8年の周期でクヌギの木を伐採し、人が常に手を入れながら、里山をつくりあげてきました。

輪伐されることでパッチワーク状

の景観となり、それによる多彩な環境では多くの動植物が見られます。

人の生活のために利用される里山が現在も残るのは全国的にも非常に稀で、歴史性、実証性、生物多様性、景観性の観点から日本一の里山と呼ばれるのに十分な資格があります。



兵庫県立大学
名誉教授
服部保さん(67歳)

里山の生物多様性保全と里山の再生や照葉樹林の生物多様性保全などに関して研究。黒川の「日本一の里山」を提唱。

岐路に立つ日本一 人が手を入れなければ廻らない生命の輪

遠い昔から利用されてきた日本の里山。戦後、次々と姿を消していきましました。人が手を入れなければ、生命の輪は廻らない。それが里山の仕組みです。茶席の高級炭「菊炭」の生産が残した黒川の里山。いつしか「日本一」と呼ばれるようになりました。今、その里山が岐路に立っています。残るのが、それとも消えるのか。黒川には、「責任」を持って里山を守る人がいて、行く末を「覚悟」する人がいます。今ある「息吹」をつなぐため、私たちにできることを考えてみませんか。



1_ 菊炭の原材料となるクヌギが切り出されるのは12～5月 2_ 台場クヌギの平原。切られた幹から枝が伸びる 3_ 4月には始まる萌芽 4_ 窯に原木を入れ、火を回して蒸し焼きにする工程は1回約1週間 5_ 高温の炭窯内。簡易な装備での作業。長時間は入れないため、交代で炭を出す 6_ 体の熱をとるため、休憩に入る 7_ 炭焼きは冬から春にかけてのクヌギの伐採に合わせるため、期間が限られる。窯出し後すぐに次のクヌギが窯に入れられる





1_ かつて日本中で見られた四季の姿が黒川には残る 2_ 里山には広葉樹が多い。秋は最も美しい季節の一つ 3_ 新春恒例の「とんと焼き」
4_ クヌギ林脇を流れる清流はやがて田畑へと引かれる 5_ 県の絶滅危惧種に指定されるエドヒガンザクラ 6_ ホタルの数は阪神間でも随一



7_ 維持できなくなったビニールハウス 8_ 一見美しい棚田に見えるが、手前は耕作放棄地 9_ 放棄地の雑草を刈り取る姿は真夏でも見られる

◎黒川地区の高齢化率は45%を超える。多くの場合、所有する山林の保全を続けることは難しい。森林ボランティアやNPO法人などの整備地を除き、クヌギ林の多くが、里山としては荒れた状態へと変わっている。山林だけではなく、近年では耕作放棄地も目立つ。周囲で育成する農作物に影響を与えないよう、隣接する田畑の所有者などが手入れを続けている。

これが最後のチャンスやと思う

しょう』ってあいさつするんです。村の文化やから、年寄りばかりでも絶やしたらあかんと思ってやってきました。でも実は昨年、集落にできた唯一の助産院さんが、通院する親子をたくさん連れてきてくれてね。楽しそうにはしゃぐ子どもの声に、思わず胸が熱くなっちゃった。もしかしたら、自分の子の走り回る姿が脳裏をよぎったんかもしれへんね」

村は年を取りました。黒川は昔に戻ることができません。山に入り、炭を焼く、そんな生活に戻ることはできないのです。

「何もなければ、それで村は消えていくのかもしれない。10年20年先を考えるのはつらい。でも黒川は、今西さんのところが菊炭の生産をしてくれているおかげで『日本一』というブランド名をもったんです。僕はこれが村の将来を変えられる最後のチャンスやと思ってます。かつこいいことは言ってられへん。今作っている農産物を売るのも、働く場所を確保するのも、これからの黒川を考えるのも、いろんな人の手を借りて、やっていかなあかんのですよ」

きれいやね、ええとこやね
「じゃあ住もか」とはならんのです

黒川自治会長
畑中隆さん(65歳)



黒川に広がる田畑。特産の栗やクヌギのほだ木に生えそろうシイタケ、山裾の棚田に育つ稲が収穫の時期を迎えています。

地元やボランティアの人たちに手入れされた「黒川ダリヤ園」。行楽のシーズンとなり、多くの観光バスを見掛けるようになりました。

山に入れば広がるクヌギ林。企業の支援により生まれた里山に森林ボランティアが手を入れ、伸びた枝葉は、冬の伐採の時期を待っています。

黒川に住む人と支援の手。そして訪れる人たち。里山は豊かな実りの秋を迎えています。

「今、数えきれない人たちが、この地を盛り上げようとしてくれている。僕らは応えなあかん。それは、住む人間全てに関わってくるはずなんです。ずっと昔から守ってきた僕らの里を、黒川という地を、次の世代に残すことを思うなら、『日本一』を知ってもらって、訪れてもらって、手伝ってもらって、そしてこの村に活気を作らなあかん。もう四の五の言ったらへんのやから」

春に咲くエドヒガンザクラ、初夏のホタル、夏の水辺に秋の紅葉、冬には炭焼きが始まる——季節によってさまざまな表情を見せる里山の顔。

「きれいやね、ええとこやね。訪れてくれた人たちはいつも言ってくれます。ただ、それで『じゃあ住もか』とはならんのです」

黒川自治会長の畑中隆さん。集落内で市立明湖キャンプ場長として働いています。

「僕はここの場長ですから、それで飯が食える。でもね、『日本一の里山』言うってもらっても、皆それだけでは自分の生活には結びつかへんのです。『俺に何の関係があんねん』ってね。それはおかしいことやないと思いますよ」

現在、黒川地区に住むのは35軒100人と少し。その多くは高齢者です。

「後継ぎがいらない。子どもたちはほとんど出て行ってしまいたからね」

自治会では、毎年「運動会」を開催。昭和52年に休校となった黒川小学校（現黒川公民館）のグラウンドを利用しています。例年、参加するのは50人ほど。成人した住民はかりです。

「僕ね、『日本一』の里山で、日本一小さな運動会を続けていきま



資源として 黒川を観る

観光資源の発掘と活用の検討開始
魅力あるスポットを組み合わせる

問合せ 文化・観光・スポーツ課 Tel (740) 1161
※黒川ダリヤ園については公園緑地課Tel (740) 1185へ

「黒川が無くなれば、日本に本当の意味での里山は無くなります」兵庫県立大学名誉教授の服部保さんにそう言わせるほどの地。それでも、自治会長の畑中隆さんは「いい選手はたくさんいるんやけどね。人に訪れてもらうためには、うまく打順を考え、バッテリーを組まない」と悩みます。

里山内にはエドヒガンザクラ群落「桜の森」が広がり、集落には明治37年に建てられた県内最古級の木造小学校、旧黒川小学校が存立。

都市圏内のレジャースポットとして知られる知明湖キャンプ場や秋の風物詩となった「黒川ダリヤ園」、ハイカーなどでにぎわう妙見山、黒川には多



黒川小学校北棟
明治37年に建設された



1,200株を数える「黒川ダリヤ園」



「桜の森」エドヒガンザクラ
樹齢100年を超えるものも見られる

くの魅力があります。

大阪から車で約1時間の場所にある豊かな資源。市は、民間事業者のノウハウも活用しながら組み合わせ、市内外に発信していかなければいけないと考えています。

今年度、黒川地区の観光資源を発掘・再発見し、有効に活用するための検討が始まりました。「黒川ダリヤ園」では、新たな整備や運営の計画策定に向けてスタートします。

黒川を訪れる人を増やすために何ができるのか。行政と民間事業者、住民団体、ボランティアなどが協力し、動き始めようとしています。



しまざき助産院 島崎明代さん(47歳)

平成23年9月、黒川に転入。24年5月に自宅で助産院を開業した。シックハウス症候群などを気につけた無添加住宅で、入院時の食事には黒川産のオーガニック野菜や米などを使用。助産以外にも、産後ステイや料理教室、マタニティヨガなどでも、お産の手伝いを続けている。夫、長男、長女4人で暮らす。

自然出産にこだわる「しまざき助産院」。7年前、開院のために土地を探していたところ、島崎さんは黒川にたどり着きました。「納得いく場所に巡り合うまで2年くらいかかりました。かなりあちこち見て回ったんですけどね。絶対ここがいいって思いました。決め手は環境です。大自然の中なのに都会から近く、最寄り駅まで徒歩で行ける点も大きかったですね。助産院として、緊急時には大切なことなので」

将来、理解ある人の力が必要になる

「ほんとう、四季を通じて美しい所なんです。それは、里山だけではなく、集落一帯です。皆さん毎日掃除をするから。草刈りをするから。人の手で景観は享受できるって実感します。ただ、いつまでもは続けられないですよ。近い将来、若い人の力が必要になります。それは私たちのような新しい住民だったり、黒川に理解のある皆さんだったりするのかもしれないから」

なのに私の旦那よりもよっぽど体力のある人ばかりです。でも、皆さん忙しいですね。人が少ない分、地域活動に多く加わらないといけないから」

黒川の一歩好きなところが景観だと話す島崎さん。



能勢電鉄株式会社 鉄道営業課

岡本淳一さん(54歳)

市内を縦断する能勢電鉄。平成25年に開業100周年を迎え、ターミナル「妙見口」駅〜黒川地区内ケーブル・リフト一帯の施設をリニューアル。「妙見の森」と名付けられたお出掛けスポットは多くの観光客でにぎわう。10〜11月には黒川などを中心に「のせでんアートライン 妙見の森2015」(8ページに掲載)を開催。

あんなに
なまら
かわにし

「集落を歩いていると、野菜をくれたりするんですよ」
岡本さんは、能勢電鉄沿線を歩く「のせでんハイキング」を企画してきました。中でも、黒川周辺を歩くコースは人気とのこと。
「里山って、生物の種類が多いんですよ。ハイカーには動植物などが好きな人も多く、熱心に撮影をする人もよく見掛けます。あと、木造建築として貴重な旧黒川小学校を昼食場所に設定すると、すごく喜ばれますね」

黒川は沿線の魅力を発信する出発点

「特に旧黒川小学校はアーティストに人気です。存在そのものがアートですから、芸術作品を飾ると映えるのかもしれないね。秋には妙見山を含む黒川一帯がアートでいっぱいになりますよ」
能勢電鉄の終着駅「妙見口」からすぐの妙見山。アートラインのメイン会場となります。
「能勢電鉄の役割は、お客様と沿線地域をつなぐこと。黒川が人を引き付けるものは何か、考えていかなければいけません。終着の地は始発の地。日本一の里山は沿線の魅力を発信する出発点にふさわしい。それに、府県境にある妙見山は地域をつなぐ象徴です。アートラインで、そのメッセージが伝えられればと思います」



気が遠くなるほどの時間
守り続けてきた灯
何も変わらなければ
消えてしまうのかもしれませんが
今、黒川に残るのは35軒
暮らす人、炭焼きを継ぐ人、日本一を背負う人になれなくても
私たちが知り、そして伝えなければ変わらない
里山の姿を、あなた自身の目で見てください
理解の輪を広げるために
生命の輪を廻し続けるために